

〈海外雑感〉

北朝鮮訪問を終えて

中嶋 嶺雄(東京外国語大学)

私たち当学会東アジア分科会では、かねてから北朝鮮に関する討論も重ねてきていたが、様々な評価が交錯する朝鮮民主主義人民共和国を実地に訪れて見聞するとともに、日朝間の学術交流の扉を広げたいという希望ももっていた。当学会でも関寛治会員らの個人の努力が積み重ねられていたが、学会として、そのような交流を試みたことはなかった。昨年6月、朝鮮社会学者協会代表が訪日した折に、当学会東アジア分科会として交流の窓口を開く最初の機会をもつことができた。このときの懇談を基礎にして、昨秋、北朝鮮側から交流に応じたいとの意向があったので、私は本学会の運営委員会、理事会にその旨を報告して了承を得、昨年12月初旬に第1次訪朝団(団長・松本三郎会員)5名の訪朝が実現し、引き続き、去る4月下旬から5月上旬にかけて第2次訪朝団(団長・中嶋嶺雄)8名が1週間にわたって平壤に滞在した。

北朝鮮側の受入れ機関は、朝鮮社会学者協会傘下のチュチェ科学院(リー・スグ<李地洙>院長)であり、

私たちは平壤滞在中、チュチェ科学院をはじめ、朝鮮社会学者協会の代表、国際問題研究所(リー・ツェピル<李宰弼>所長)の代表らと、北朝鮮やアジアの国際関係をめぐるすべての問題について、また、日朝間の将来の学術交流について、きわめて率直に語り合うことができた。とくに印象深かったのは、朝鮮労働党中央委員会書記として、この国の最高イデオログであり、金日成総合大学学長を15年間もつとめたホワン・ジャンヨブ<黄長燁>朝鮮社会学者協会委員長との2回にわたる延べ8時間半もの懇談であった。日本語に堪能なばかりか、洋の東西の学問に通じた黄委員長が、「日本の学者の使命は大きい。どの国の学者とよりも、日本の学者に会って、憂いを分けあいたい」と発言されていたことが強く印象に残っている。

中国の天安門事件、東欧諸国やソ連・モンゴルの変動という世界史の転換期のなかで、チュチェ思想に基づく独自の社会主義体制を堅持しようとし、金日成・金正日父子権力継承体制を固めようとしている北朝鮮ではあるが、その前途に予断は許されまい。大同江を中心に開けた巨大な近代都市・平壤は、その昔、柳京と呼ばれただけあって、柳の並木が美しい首都であったが、この国の行方を除外してアジアを語るわけにはゆかないことを私自身は痛感した。

若手研究者の声

「東欧の新情勢に
期待する」

坂本 清

(一橋大学大学院)

私の研究領域のひとつであるチェコスロヴァキアの歴史的イベントを振り返って考えてみると、8のつく年に大きな事件がこれまで起こってきたことに気がつく。そもそもの独立が1918年、ミュンヘン協定によるズデーテン地方の割譲が1938年、1948年2月には共産党の政権奪取、1968年8月のチェコ介入事件といった具合に、10年、20年を周期に特筆すべき事件がこれまで起こってきたのである。こうした観点からも、研究者の関心事として、1988年がとりわけ注目されていたわけであるが、歴史の展開は計算通りには進ま

ず、1989年になってチェコでは、大きな政変が起こった。しかも、今回の出来事もまた、東におけるソ連のペレストロイカと西における東ドイツ政権の崩壊という外部からの影響がものをいってのことであった。しかし、第二次大戦の勃発からちょうど半世紀にあたる1989年に、チェコをはじめ、ルーマニアに至るまで、東欧諸国が革命と呼ぶにふさわしい政治的変動を経験した点は、戦後の総決算とも呼べる現象でもあり、後世の歴史家はこの年をひとつの画期と位置づけることも充分ありえよう。

さて、国際政治史の研究に取り組む人間にとっても、現在の東欧情勢の成り行きへの関心はつきないのがあるが、何といっても期待されるのが、新政権のもとでの資料公開である。これまでは、本格的刊行史料といえば、外交史研究の盛んなポーランドの例を除けば、何らかのテーマに限った史料集とソ連と東欧諸国と

の2国間関係の史料集に、ほぼ限られていたといっても過言ではなかった。さらに、国際政治史研究の分野でも、全般的に論ずればの話であるが、政治体制を反映した公式主義的見解の影を払拭できずに終わっていたといえよう。1930年代の東欧諸国とソ連との関係を論ずるにしても、最も密度の濃い史料といえば、1年を1冊でカバーしたソ連の外交文書がせいぜいであった。研究者は必然的に、周辺諸国の未刊行史料に丹念にあたることを余儀なくされてきた。それでも、様々な制約の中で、東欧系の研究者の最近の業績には、最近アメリカで刊行されたヴァンディッチャルングの刊行書など、当該国の未刊行史料にあたった注目すべきものが出てきている。ソ連・東欧での改革の進展は、旧来の史料状況に依拠するような研究者の研究姿勢にもペレストロイカをもたらずものであってほしいものである。

JAIR Newsletter

日本国際政治学会ニューズレター

NO. 52 July 1990

天下大乱

藤 牧 新 平 (東海大学)

「東風、西風ヲ圧ス」(1957年11月モスクワにおける世界共産党会議における毛沢東演説)

「天下大乱。山雨到ラント欲シテ、風樓ニ満ツ」(1973年8月中国共産党第10回大会における周恩来報告)

この二つの発言から、それぞれ33年、17年経って、1990年になっても、どっこい生きている私が、同時に思い出すのは、もちろん、昨年1年の大激動である。曰く、天安門事件。曰く、ベルリンの壁崩壊。曰く、チャウセスク夫妻銃殺……。

この30数年の現代史をふり返って見ると、西風が東風を押し、天下大乱で倒れたのは、共産党政権であった、という外はない。どうして、こうなったのか?

ロシア語の諺に、「草の育つのを聞く」というのがあるそうだ。昨年1年の「大乱」に腰を抜かした私は、つくづく「草の育つ」のを、耳を澄まして聞いていなかった、と反省させられた。

一葉落ちて天下の秋を知る。をもちっていえば、草の育つを聞いて、天下大乱を想う、でないといけぬ。だが、スターリン、毛沢東、チャウセスクに至っては、聞く耳を持たないどころか、その「草」を力まかせに刈取ってしまったのである。そして、その結果、ソ連では、78万余りの人間が、「人民の敵」として銃殺、中国では、「毒草」が抜かれ、数十万の餓死者が出、ルーマニアでは、とうとうチャウセスク夫妻が、逆に処刑された。

では、今、一体、どんな「草」が育っているのか?

これを聞くには、聖徳太子のような、特別製の耳を持たなくてよい。誰でもが知っている、毎日の出来事を、よく観察さえすれば十分だ。

例えば――

* 世界第一の借金大国アメリカの通貨が、世界経済の基軸通貨である。

* 「南」から「北」へのカネの逆流は止まない。

* 多国籍企業は黒字、国は赤字。

* 貿易の実需の30数倍のカネが、24時間、世界中を駆け巡っている。

* 「北」の余剰食糧は、「南」の餓死救済に必要な分を、遙かに上回る、等々……。

これらの事実は、とっくの昔から、多くの人々によって指摘されていることだが、一向改まらない。ということは、世界経済は、政府や個人の願望とは関係のない、「見えざる手」で動かされていることを意味する。今まで、「社会主義」経済は、この「手」とは無縁で、中央政府の経済計画の下で、合理的に運営されている、といわれたが、それは、全くの神話に過ぎず、やはりそこでも同じ「手」が働いて、昨年の一連の大爆発を引き起したのである。

私が聞く「草の育つ」音は、明かに、天下大乱を告げている。1929年型の大恐慌によって、現在の「カジノ経済」がバンクし、それから、覇権を争う大国間の合従連衡の末、その結果として第三次世界大戦という形で、爆発するのか。それとも、小出しの債務不履行や「暗黒の月曜日」のような小爆発を重ねながら、「限定」戦争の続発という形で、第三次大戦への道を避けることができるのか。

また、ソ連帝国の解体と中国の民主化とが、内戦の危機を伴わないで、順調に運ばれるのか。いずれも私には分らない。恐らく、ブッシュ、ゴルバチョフ、鄧小平にも分らないに違いない。だが、もしここで答えが出たとしたら、国際関係論は、占星術になり、ノストラダモスの大予言の一変種と化してしまう。ソクラテスの昔から、知らないことを知るのには、学問の第一歩である。それは草の育つを聞き、「見えざる手」の動きを見ることから始まる。

秋季研究大会

日 時：10月20日(土)、21日(日)

会 場：獨 協 大 学

住 所：埼玉県草加市学園町1-1

(Tel. 0489-42-1111)

交 通：東武伊勢崎線「松原団地」駅 徒歩10分